

OVERWATCH®

VALKYRIE



作 MICHAEL CHU

VALKYRIE



作者

MICHAEL CHU

イラストレーション

NESSKAIN

マーシー：ジューグラー医師 -
スキン&オリジナルコンセプト

ARNOLD TSANG

マーシー：ジューグラー医師 - モデル

HONG-CHAN LIM

マーシー：オリジナルモデル

HAI PHAN

レイアウト&デザイン

BENJAMIN SCANLON

日本語版編集

NOZOMI OSHIMA



ヴァルキリー

父とともに出かける間際の母が私にかけた、最後の言葉を思い出せない。まるであの日の冷たくどんよりとした霧が、私の記憶にもかかっているかのようだ。生きている両親を見たのは、あの朝が最後だった。オムニック・クライシス勃発後、オムニックはヨーロッパでも猛威を振るっていた。その頃スイスは壊滅的な被害を受けたばかりで、両親は混乱の最中、地元の病院でボランティアに従事していた。ふたりはそこで空襲に遭い、帰らぬ人となった。普通は愛する人が突然いなくなるなんて考えもしない。だからそのときが来ても、別れを告げる覚悟なんてできている訳がないのだ。両親を亡くしてから、何度も「時間が経てば傷も癒える」となくさめられたが、今でも些細なことがきっかけで痛みは甦る。

今日もまさにそんな日だった。ここしばらくはカイロ郊外の医療支援キャンプで働いているのだが、乗り越えることなど到底できそうにないと思わされるような課題が連日目の前に立ちはだかる。私がエジプトにやってくるまで二年ほどが経った。医療研究の責任者として所属していたオーバーウォッチを離れてから、ポーランド、韓国、ベネズエラを転々とした。いずれも、人々が私を「マーシー」ではなく、「アンジェラ・ジグラー博士」と呼ぶ場所だ。私の研究者としての評判は地に落ち、身の回りの環境をがらりと変えざるを得なかった。十年近く心血を注いだプロジェクトは、どれも解体されたり、売却されたり、私の手が届かない管轄に移された。オーバーウォッチでできたわずかな友人も散り散りになってしまった。

レナはあんなことがあった後も、危険を顧みずできる限りの活動を続けているらしい。ラインハルトはブリギッテを連れてヨーロッパを旅しているらしく、ブリギッテには少し同情してしまう。その一方で、ソジョーンはカナダで潜伏生活。ゲンジは相変わらず忙しそうにしている。最後に彼と連絡を取ったときは、お兄さんを探すために祖国に向かう、とのことだった。トールビョーンは引退して、ヨーテボリのイングリッドの元に戻ったそうだ。彼のように故郷に帰るのが一番だったのかもしれない。私はと云えば、どこに行っても在りし日のオーバーウォッチの亡霊と、罪悪感に苛まれている。オーバーウォッチは、多くの問題を残したまま解体されてしまった。私がエジプトに来たのも、そのためだ。オーバーウォッチはこの国に多くの苦しみをもたらした。だからこそ、私は復興に協力すべきだと考えた。当然ながら、温かく迎えられるはしなかった。何度「帰ってくれ」「まだ苦しめる気か」と言われたかわからない。

でも、彼らはオーバーウォッチを罵りながらも、とてつもない困難に直面したときは私たちの助けを求める。



それでも構わない。私は感謝されるために医療を志したわけではないのだから。

死んだはずの男にしては、ジャック・モリソンはずいぶん元気そうだった。顔に派手な傷跡があるが、角張った顎のラインも純真無垢な雰囲気もそのまま、相変わらずノーマン・ロックウェルのイラストから飛び出て来たかのような。彼は背中中の化膿している傷を治療するため、ハンハリーリの市場からほど近い、家具もほとんどない私のアパートメントを訪れた。彼を見ていると、背中中の傷よりも深く心に刻まれた傷跡が痛んでいるのが伝わってくる。怪我をした詳しい状況を聞き出そうとしたけれど、口数の少なさも相変わらずだった。そう、ジャックは昔から扱いづらい患者だった。

「ジャックが殺されることがあるとすれば、その強情さゆえだろう」

キッチンから聞こえる声の主、アナ・アマリは紅茶を探して戸棚を引っかき回している。すっかりくつろいでいるようだ。奇跡の復活を遂げたのはジャックだけではなく。ポーランドでスナイパーに撃たれて死んだものと思われていた彼女が、どういうわけか今ここにいる。以前に比べ年を取り、痩せたように見える。記憶しているより少し儂い印象で、アナと知り合ってから初めて、彼女も人間なのだと実感した。武官のような身のこなしは変わらないものの、厳しい雰囲気が和らぎ、どこか柔和な空気すら漂わせている。彼女のこういった面は初めて見た気がする。

「検査することもできるけど、ここには必要な器材がないわ」

ジャックの背中中の傷に、麻酔作用のある液体絆創膏を吹きつけてやる。

「医療支援キャンプには研究所のような設備はないし……」

「時間がない。医療キットをくれ。それでなんとかする」

ジャックが冷淡に言い放った。

「……何かないか、見てみるわ」

彼が携帯しているバイオティク・グレネードと、アナの弾帯に押し込まれたカートリッジ・ダーツ。どちらもオーバーウォッチから盗んだもの——ダーツに至っては私が開発した技術を許可なく改変して作られたものだ。オーバーウォッチにいた頃の不満を思い出す。こんなにも苛立つなんて、自分でも意外だ。ジャックとアナが生きていたことを素直に喜びたい。でも目の前のふたりは、私が何より逃がりたい過去の体現そのものなのだ。自分とふたりとの間に、壁ができるのを感じた。

リビングルームの大半を占める物資の箱を漁ってみたが、あるのは包帯、未開封の抗生物質、その他雑多な医療器具ばかりで、どれも今のジャックの治療には役立たない。オーバーウォッチの痕跡は、解散して数年が過ぎた今なお残っている。エジプトの崩壊しかけたインフラから、包帯の入っている水色のパッケージまで、日常の至るところに。実際問題、オーバーウォッチから逃がられると思うこと自体、あまりにも楽観的な考えだった。

ジャックも物資の入った箱を漁り始めた。近くに必要なものを積み上げている。

「アンジェラ。ここで何をしている？」

「医療キットを探してるわ」

私は短く答えた。

「あなたが欲しいって言ったんじゃない」

「そういう意味じゃない」

彼は手に取った高価な医療用スキャナーを、いぶかしげにひっくり返す。

「カイロで何をしている？」

「それ、壊れやすいのよ」

私はジャックを睨みつけ、スキャナーをひたたくって乱暴に箱に戻す。どすんと嫌な音がした。ふうと息を吐いて、呼吸を止めていたことに初めて気づく。

「ここの人たちを助けないといけないから」

ここで何をしている。ジャックの問いかけを反芻し、人助けだ、と自分に言い聞かせる。カイロの市民は私を必要としている。今のエジプトは数多くの問題を抱えているというのに、手を貸そうとする人は少ない。人を食べ物にするハゲタカのような連中まで引き寄せられている。以前のような派手で刺激的な日々ではないけれど、ここにいれば議論を引き起こさないし、誰かのためになれるのだ。

「病院や大学の研究室のほうがそなたには合うだろうに」

ようやく好みの茶葉を見つけたらしいアナがやってきた。

「世間は元・オーバーウォッチ高官には厳しいの」

思ったよりも語調がきつくなった。私は深く息を吸う。まるで、月日がまったく経っていないかのようだった。白熱した議論を交わした、最後に集ったあの日に引き戻されたかのような気分だ。

「できれば目立ちたくない。あなたたちは違うみたいだけど」

ジャックが顔をしかめる。

「俺の目から逃げることはできないということを敵に知らせてやってるんだ」

「敵、ねえ」

まったく呆れ返る。

「あなたの敵って…… 合衆国政府、ドイツの最大手銀行、それとヘリックス・セキュリティ？ 他にもいたかしら？」

「ルメリコだ」

そう答えるジャックは厚かましくも誇らしげだ。

「絶大な人気を誇る元大統領と、万人に愛される“戦争の英雄”が経営するメキシコ最大手のエネルギー企業……」

思わずため息をついてしまう。

「そんな連中を敵に回してたら、いつまで経っても悪人のままよ」

「戦争に損害はつきものだろう」

当然だと言わんばかりだ。

「相変わらず、なんでも合理化してしまうのね」

確かにそういった柔軟さは、以前のジャックが生き延びるためには必要だっただろう。“生き返った”今も、その特徴は変わらないようだ。

「もうすぐ黒幕にたどり着く。真実に手が届きそうなんだ」

ジャックの声から滲む熱は、強迫観念じみている。

「真実」

私は彼の言葉を繰り返した。

「オーバーウォッチに起こったこと。それに、タロン。スイス。すべての真実を明らかにするのが俺の今の任務だ」

「前と大して変わってないわ。マスクをしてるってところ以外は」

「なら、どうしろと？」

ジャックの語気が鋭くなった。

「ジブラルタルに飛んで、ウィンストンと合流しろとでも？ オーバーウォッチを崩壊に追い込んだ連中が、あいつのことを放っておいてくれるとでも思ってるのか？」

ウィンストンはオーバーウォッチこそが世界を蝕むすべての問題への解決策だと思っている。なぜオーバーウォッチが破綻したのか、考えたことがないのかもしれない。ウィンストンはオーバーウォッチを心から愛していたし、彼自身にとってオーバーウォッチは必要なものだった。思い入れが強すぎたせいでオーバーウォッチが私たちを傷つけ、変えてしまったことを理解できずにいる。現にジャックやアナと再会しても、全員の傷がまだ癒えていないことを痛感させられるばかりだ。今までと同じことをしたところで、再び破綻するだけだろう。世界にとってそんな事態は必要ない。ウィンストンが良い行いをしようとしているのは確かだ。だからといって、彼が正しいことにはならない。

「ヒーローごっこがしたいなら、させておけばいい」

ジャックは淡々と言った。

「俺は為すべきことを為す。レイエス、オグンディム、マクシミリアン、ヴィアリ、ソンプラ、オデオレイン…… 全員始末する」

レイエス。その名を聞いただけで、背筋が寒くなる。ジャック、アナ、レイエス。三人とも死んだはずなのに、彼らの亡霊はまだ地上をさまよっている。

「私たち全員に責任があるのよ、ジャック。オーバーウォッチはもうないの。復讐したところで、何も変わらないわ」

「連中に裁きを受けさせるまで、立ち止まるわけにはいかない」

「裁き……？」

冷めた笑いがこみ上げる。ジャックは痛みで蝕まれ、飲まれてしまっている。

「こんなことをしては、人々がオーバーウォッチに対して持っていた懸念が現実になったと証明するだけよ。どうして分からないの……」



初めてジャックのオフィスに向いたときとは、なにもかも変わってしまった。あの頃の私はチューリッヒにある大学病院の外科部門主任部長の職を辞したばかりで、やる気に満ち期待を胸に抱いていた。ジャックのオフィスは、まるで博物館のようだった。壁のあちこちにストライク・チームやジャックと各国首脳が並んで写った写真がかけられ、彼の軍人としての輝かしい来歴が伺える品々が飾られていた。壁沿いの本棚には、アンティークらしい革装のトゥキディデスの『ペロポネソス戦争史』や、著名な将軍の伝記などの歴史書がきちんと並べられている。サイドボードの上にはゲームの途中らしいチェス盤が置かれ、隣にページの隅が折られた『ボビー・フィッシャー 魂の六十局』があった。そんな部屋に置かれた大きな机の奥に座っていたのが、ジャック・モリソンその人だった。

「君の論文を読んだよ。すばらしい。色々アイデアが浮かんだ」

ジャックが口を開いた。彼の言う論文というのは、その頃出版されたばかりだったナノバイオティック・ヒーリングに関する私の論文のことだ。私はナノバイオティック・ヒーリングが日々の診察だけでなく、医療全体に大革命をもたらす可能性があるかと信じていた。その日が来るのを待ちわびるあまり、オーバーウォッチでなら他の組織よりも早く私の説を世に広められるのではという考えに至ったのだ。

「私の論文をお読みになったのですか……？」

彼は大学院生も読みこなすのに時間を要するような、極めて技術的な研究論文を読んだのだろうか？ 私は驚いて、つい聞き返してしまった。

「要点は掴めたと思う」

ジャックが小さく笑ったのを見て、それ以上詰問しないことにした。なにしろ、彼は王国への鍵を握っているのだ。

「要旨はなるべく読みやすくするよう心がけています」

私は微笑んだ。おしゃべりもそこそこに、ジャックは本題を切り出した。

「アンジェラ。君を医療研究の責任者としてオーバーウォッチに迎えたい。我々なら君のナノバイオティック技術の開発を支援できる。想像してみてくれ。これは世界中の人々の生活を変えうる技術だ。人類の平均寿命を延ばすことだって夢じゃない」

当然、私もそんな未来を想像していた。AI技術が進歩し、本格的な製造ラインが整えば、バイオティック技術を世界中に届けられる。医療を受けるハードルばかりか、治療に費やさなければならない時間も減るかもしれない。医療の新たなパラダイムの幕開けだ。ジャックはそれを私に約束していた。

「資金、設備、人員は任せなさい。君は自分のやり方で物事を進める人間だと聞いている。采配や、規則の取り決めは君に任せよう」

「助手が必要です。ご用意いただけますか？」

「もちろんだ。見くびってもらっては困る」

ジャックは窓の下の中庭を見ながら言った。青いアーマーに身を包んだ部隊が整然と隊列を組み、芝生の上を進んでいた。

「オーバーウォッチの兵力は充分だ。今我々に必要なのは考える者や夢を見る者——世界をよりよい場所にせんとする人間だ。君は地球上の全人類の生き方を変えられる。俺はそんな君の夢を実現させてやりたい。君が何の障害もなく研究に集中し、医療に革新をもたらす手助けをさせてくれ」

これ以上ないほど完璧なオファーだった。できすぎた話と言ってもいい。「光るものすべてが金ではない」という言葉が脳裏に浮かぶ。トルビョーンの好きな言葉だ。私はなんでも疑うようにしている。子供の頃からそういう気質だったが、医師として受けた教育と、おそらくトルビョーンとの長年の付き合いによってさらに研ぎ澄まされた結果だ。研究者としては何かと役立つ性質だけれど、そのせいで私にあまりいい印象を持たない者も少なくない。

「素晴らしいオファーですね。ですが、条件があります」

「言ってみろ」

「民間と平時に適用する目的で研究を進めさせていただきます。オーバーウォッチのコマンダーが部隊を危険地帯に送り込むための口実は作りたくありません」

ジャックは両手の指を合わせた。

「オムニック・クライシスの終息から十年以上経った。確かにオーバーウォッチは戦争に勝つために編成されたが、今は新たな任務に取り掛かっている——世界をよりよい場所にするのだ。我々は生物学、化学、インフラ、気候学……人々の暮らしを改善するあらゆる科学プロジェクトに投資してきた。君にも、我々の活動に加わってもらいたい。君はオムニックの発明以来、人類最大の変化をもたらせるかもしれないんだぞ」

軍人らしく短く切り揃えられた髪に、勲章や褒賞。ジャックはどこからどう見ても兵士だった。彼の背筋をピンと吊り上げる、長年の軍隊生活によって紡がれた糸が今にも見えてきそう。彼は与えられた命令を疑わず、信じている兵士なのだ。でも、もし本当に世界を変えるチャンスがやってきたのだとしたら、私はそのために力を尽くすべきではなからうか？ ジャックの活動も長年見てきた。彼は多くの功績を挙げてきた。彼を尊敬し、彼のために働く優秀な人々もいる。彼が自分の言葉を心から信じていることは疑うべくもなかった。私自身もまた、彼を信じたいと思った。

「君の考え方は理解している。長年の付き合いだからな。これは君にとって願ってもないチャンスだろう」

ジャックは言った。

「助成金も申請しなくてよくなるし、新しい機材の価格交渉もしなくていい。必要なものはすべて揃えると約束する」

「助手の件も？」



唇から笑みがこぼれた。

「いくらでもつけてやろう」



机に突っ伏して眠ってしまっていたらしい私は、爆発の衝撃とともに飛び起きた。地面が大きいため息を漏らしたかのように揺らぎ、後に続いた小さな爆破が窓ガラスをガタガタと鳴らす。電灯がチカチカと明滅した。雷の遠鳴りも聞こえる。悪天候と戦闘の音はまったくの別物だ。戦争を生き抜いてきた者なら誰もが知っている。私は急いで身支度をした。カイロ暮らしも長くなり、雷鳴のあとに何が起こるかは分かっていた。キャンプで患者を受け入れる準備をしなくては。

ほどなく、ジャックとアナが戸口に現れた。ふたりは暗闇に佇む亡霊のよう。見慣れた顔はそれぞれマスクに覆われ、赤い一筋のラインと、青いダイヤモンドだけが光っていた。

「何が起きたの？」

「アヌビスの施設が攻撃された。すぐに向かう」

ジャックの声がひずんでいる。口元を覆うマスクで声を変えているのだろう。まるでロボットのように、人間味が感じられない。

「ここはヘリックスに任せればいいわ。行っても巻き添えを食うだけよ」

「相手はタロンだぞ」

意見を変える気はない。そう言わんばかりの口ぶりには覚えがあった。

「アンジェラ、外にはすでに巻き添えを食われた者たちがいる。ヘリックスが彼らに手を伸ばすことはない」

アナは、私の抗議を遮るように続ける。

「そなたも一緒に来るか？」

カイロの救急医療の現状は誰よりも分かっているつもりだ。前回の襲撃の被害は広範囲に及び、都市の大部分は今も復興の真っ只中だ。キャンプには住処を失ったり、負傷したりした人たちがまだ残っている。それ

なのに平和維持部隊のヘリックスは、実際のところ傭兵に毛が生えた程度の存在でしかない。彼らはあくまで政府を守るために雇われたのであり、国民を守るためには動かない——オーバーウォッチの代わりなのだから当然なのだが。私はキャンプに留まるべきだ。押し寄せる人々にトリアージを行う準備をすべきだ。そうすべきなのに。

「行くわ」

ヴァルキリースーツは大きな箱に詰めたままだ。小気味よい音とともに生体認証錠を解除し、パーツをひとつずつ取り出す。胸当て、情報通信システム、スキャン・バイザー、バイオティック・チャージ、推進システム、そしてカドゥケウス・スタッフ。すべて、それぞれの形状に合わせて型取った緩衝材のなかに収められている。どれもしばらく使われていない。白い胸当てを撫でると、戦場に出ていた頃についた傷やへこみが感じられた。それほど危険な状況を掻い潜ってきたのだ。留め金をかけ、電源を入れると、スーツが自動的に体を包み込んだ。次にカドゥケウス・スタッフを手取る。グリップは私の両手の形にくぼんでいる。緊迫した戦いの中できつく握りしめていた跡だ。最後に、ヘッドセットとプロセッサー・ユニットを身に着ける。私に必要な情報を送ってくれる、スーツの生命線だ。

スーツはまだぴったりだったけれど、こんなに重かったなんて。



空を飛ぶと、世界が変わる。ストライク・チームのメンバー全員、空を飛ぶことで視界が開ける瞬間を経験していた。レナはパイロットだったし、ウィンストンにいたっては宇宙船で月からやってきた。初めて宇宙から地球を眺めたときに人生観が変わったと話す宇宙飛行士は多い。でも、そんな彼らも私のように飛ぶことはない。

眼下にカイロの街が地平線まで広がっている。かつては緑の都市だったが、喪失の十年を経て茶色く色あせている。ナイル川沿いに作られた最先端のアグリテックが、徐々に生命を蘇らせ始めているのが見える。河岸には国内では使い切れないほどのエネルギーを蓄えられたソーラーパネルや巨大バッテリー施設が並んでいる。エジプト文明を育んだナイル川を擁する街だ。疑い深い私でも、現状が長く続くとは思えない。太古の昔からあるピラミッドが番人のように街を見守っている。ピラミッド群の影に、戦場が広がっていた。

三人で襲撃現場に向かうと、ヘリックス・セキュリティの部隊がタロンの部隊と激しい戦闘を繰り広げていた。黒と赤のドロップシップが猛禽のように旋回している。頭上に、投下された武装ラプトラ部隊のジェット噴射が見えるが、メディックがついている彼らを心配する必要はない。問題は乱戦のなかに撃ち込まれたロケットの爆破だ。地上では、ふたりの老兵の影が薄暗い通りを進んでいる。赤と青のジャケットを着ているジャックは驚くほど目立たない。彼が隠密行動を取っているのを見るのは初めてで、妙な感じがする。ヴァルキリーのスカナーがなかったら、きっと彼を見失っていただろう。

そもそも、私が戦闘というものを完全に理解したことはなかった。攻撃作戦に、布陣に、戦術…… そういったものは仲間に任せて、私は自分の役割である人命救助に集中するべきだ。民間人が一帯から避難しようとしている。ヘッドセットのディスプレイに、近くの生命反応を示す輝点が大量に表示されている。状況を正確に把握しなければ。まずは、巨体のタロン兵と戦い始めたジャックとアナを個別に追跡する。

私は“マーシー”になんてなりたくはなかった。しかし、ならざるを得なかった。ヴァルキリースーツを

完成させたことで、私の技術が実用できることは証明された。でもそれだけでは周りの期待に応えたことにはならなかった。チームメイトは肩を並べて戦える仲間を求めている。こうして、徐々にジューグラー博士としてではなく、マーシーとして生きるようになっていった。

アナが高所から見守る中、ジャックは危険を顧みずに戦う。赤と白のマスクをつけたタロン兵がいたるところで青い制服のヘリックス兵を追い詰めている。突然、爆発が次々と闇夜に響く。闇夜よりも暗い何かに、目が釘付けになった。中から黒い人影が現れたかと思うと、その中心から雨あられのように銃弾が放たれた。ふたりの老兵は身を翻し、私の視界から消えた。私は息を呑み、押し殺した声で尋ねた。

「あれは？」

「ガブリエルだ」

イヤピースに響くジャックの声の厳しさに、思わず顔を歪めた。頭の中にいくつもの疑問が浮かんだが、今は気を取られるわけにはいかない。

「彼に構ってる場合じゃないわ、ジャック。市民の救助が優先よ」

「それは君の仕事だ、ドクター。俺たちはこっちを片付ける」

そのまま、通信が途絶えた。

アナが背後を油断なく見守る中、ジャックが飛び出す。ふたりはむせ返りそうな煙霧に飲み込まれていった。

ジャックの言う通り、私にはやるべき仕事がある。今はふたりのことを心配してられない。

タロンは人命も、退避する民間人も、物的損害もお構いなしに戦う。傭兵に毛が生えた程度のヘリックス・セキュリティも大差ない。ロケット弾が飛び交い、建物を破壊する。市民が怯えながら逃げ惑う。

ディスプレイに何度も眼下に生命反応あり、と表示されるものの、ほとんど何も見えない。ディスプレイを信じて渦巻く煙の中へ急降下した。煙が目にも染みるが、コンタクトレンズが徐々にそれを遮ってくれた。煙霧と埃越しに、淡い光が見えた。私はヴァルキリーの操縦システムを起動し、立ち込める毒気の中、その地点を目指して突き進んだ。地面に近づき、煙も少し薄れると、光の正体がわかった。白いTシャツを着た、ダークブラウンの髪の女の子。彼女のような子を、私は何度も見てきた。戦いはどれも同じだ。兵士は生きるため、勝利のため、栄光のために戦い、罪のない人々は彼らに踏みにじられる。

少女は私を見つけると、注意を引こうと必死に手を振った。私は急いで煙の中を降り、瓦礫と化した建物の最上階に降り立った。

「大丈夫よ、動かないで。足が挟まっているのね？」

少女は頷く。表情に諦めと憔悴を滲ませながら、助けを求めて私を見上げる。

これは、私の幼少期に傷跡を残していった光景だ。戦火を逃れようとする多くの家族が引き裂かれ、夜襲で市街は区画ごと破壊された。月も星もない空には、ただ、不吉に点滅する赤い光と、どういうわけか夜空よりも暗い影が頭上を行くのが見えるだけ。そしてそれらはすぐに、白くまばゆい爆発でかき消される。シェルターに避難する時間なんてなかった。どこでもいいから身を隠さなければ生き延びられない。轟音が耳をつんざき、煙で息もできず、心の中は恐怖に支配されていた。

「今、瓦礫をどけるわ。もう少しだけ頑張っただけ」

なんとかして少女を安心させたい。

少女は目をまんまるにして、もう一度頷く。

私は少女を囚える巨大なコンクリート片をどかし始めた。もっと人手がほしい。ウィンストンやラインハ

ルト、ソジョーン、ゲンジがいてくれたなら……。ベネズエラでのことを思いだした。あの時私たちは、巨大な嵐による土砂で閉じ込められた人々を救助した。ヴァルキリースーツがなければ、私は岩の一つも動かせなかっただろう。

「あなたは——」

少女が口を開く。私が誰か分かったようだ。彼女が姿勢を変えようとするのを、肩に手を置いて制する。急に動いて興奮して、アドレナリンが分泌されれば、容態が悪化してしまうかもしれない。

「すぐに出してあげる」

そういって彼女の言葉を遮ると、壁の残骸を引っ張り脇へどけた。思わずうめき声もれた。

「こんな時にラインハルトがいてくれたら……」

「ラインハルトって？」

「お友達よ。体が大きくて、とっても強くて、すごくおしゃべりなの」

翼を広げながら、最後のコンクリート片を力いっぱい引っ張り、なんとかかかすことができた。解放された少女が立ち上がるのを助けてやる。すすと灰で汚れた顔に、涙の跡が何本も走っているのが見える。

「お名前は？」

「ハナン」

「ちょっと診させてね」

恥ずかしそうに名前を覚えてくれたハナンは、少し警戒しているようだったが、動かずにヴァルキリーに搭載された小型スキャナーの水色の光を浴びてくれた。幸い、骨折はしていなかった。切り傷と擦り傷が数カ所。少し出血しているが、それくらいなら簡単に処置できる。

私はカドゥケウス・スタッフを手に取りハナンのそばに膝をつく。バイオティック・ストリームを起動すると、スタッフは淡い金色の輝きを放ち、それは太陽の光のようにハナンを包んだ。小さな光の粒がキラキラしながらハナンの肌に触れると、彼女は目を輝かせたが、すぐに火に近づきすぎたかのように身じろいだ。

「少し熱くなるわよ。熱すぎたら教えてね」

ハナンは頷き、傷が塞がっていくのを驚いたように見つめている。

「魔法みたい」

「科学よ」

口元に笑みが浮かんでくる。

「魔法よりずっといいものよ。ナノバイオティックって知ってる？」

「ちっちゃい……機械？」

ハナンはハエを追い払うかのような動作をする。

「ちょっと違うわね」

世界の医療に革命をもたらしたかもしれない技術が、ほとんどの人には知られていない現実、少しだけ心が沈んだ。でも今はそれよりも大事なことがある。

「あとで教えてあげるわ。まずは安全なところに行きましょう」

「まだだめ！」

ハナンが私を止める。

「お兄ちゃんがまだ中にいるの、助けないと！ みんな急いで逃げちゃったの」

通りにはまだ銃声が響いている。自動小銃の耳障りな連射音と、時折響く迫撃砲の爆音。まだかなり危険

な状況だ。ハナンを必要以上の危険に晒したくはない。

「お願い」

少年を見捨てるわけにはいかないが、ヴァルキリーのスキャナーで探しても、電波の干渉でレーダーでも映像でも見つからない。

「あなたをここに置いていけないわ。頑張ってついてきて」

ハナンは頷いた。私たちがいる建物は何度も攻撃されたようだった。崩れかけた入り口に無理やり体をねじ込み、ハナンとともに階段を降りて行くと、煙が立ち上ってきた。スカートの生地を少し破き、マスク代わりにハナンの顔に巻いてやった。チカチカと点滅する灯りに照らされた屋内には警報音が鳴り響いている。吹き抜けの階段を降りて廊下に出ると、足下の床がきしんだ。廊下を進んでいくうちに、新しい生命反応を検知できた。分厚いドアの向こうだ。私はドアに肩を当て、体全体を使ってドアを押し開けた。

赤いシャツと黄色いスカーフを身に着けた少年が倒れていた。腕が不自然に曲がっている、おそらく折れているのだろう。少年の意識は混濁しているようだった。

「ハナン……？」

ぼんやりと尋ねる少年は、私たちの足音を聞きながら焦点の合わない目で天井あたりを見上げている。

ハナンが先に少年に駆け寄る。最悪の事態を恐れているのか、涙をこらえている。

「お兄ちゃん、私よ。助けを呼んできた」

「しっかりして、皆でここから逃げましょう」

少年のそばに跪きながら、声をかけてみる。このままでは循環性ショックに陥るかもしれない。動かす前に、応急処置をしなければ。少しバイオティック・ヒールを施せば容態は安定するだろう。先程ハナンを治療したときと同じく、金色に輝く光の帯がたちまち少年を包み、彼の胸部全体が光に覆われた。少しずつ、呼吸が落ち着いていった。私はハナンに向き直る。

「これでいいわ。お兄ちゃんと一緒にここから出ましょう」

ハナンは頷く。意識を取り戻したらしい少年が、恐怖に満ちた目で私を見ていることに気づいた。

「気分はどう？」

私はヴァルキリーのソナー映像を使って、彼をスキャンしながら尋ねた。こういうときは患者に話をさせて、己の体調以外に集中してもらうのがコツだ。

「痛いよ……」

少年は咳き込みながら答えてくれる。目が合うなり、何かに気づいたかのように少年が驚く。

「マーシー、だよな？ 写真で見たことある……」

「そうよ」

これで彼の気を引けるなら、気づかれたって構わない。こういうときにマーシーであることは役に立つ。

「心配しないで。一緒に外に出ましょう」

「父さんや母さんが、あなたは悪い人だって……」

少年はバツが悪そうに口をつぐむ。

「ご両親に会ったら、いい人だよって言っておいてくれる？」

少年は私の気分を害したかもしれないと心配していたようで、私が微笑みかけると表情が変わった。

「もちろん！」

少年は熱心に頷いたが、そのわずかな動きさえも、相当な痛みを伴うようだ。

「今から皆でこの建物から出なければならぬ。どう、自分で歩けそう？」

「大丈夫、だと思っ」

「なら問題なさそうね。落ち着いて、ゆっくり行きましょう。ハナンと私がついているわ」

そんな話をしていると、独特な発射音が聞こえた。迫撃砲だ。

「伏せて！」

私は叫びながらハナンの腕を掴み、倒れている少年に覆いかぶさるようにして、広げたヴァルキリーの翼と自分の体でふたりを守る。壁が砕け散り、飛んできたコンクリートとガラスが私のアーマーに勢いよくぶつかる。

天井からも大量の瓦礫が降ってきた。スーツの保護パッドとアーマーが衝撃をほとんど吸収してくれてはいるものの、あまりの重さに体がよろめく。瓦礫の雨が落ち着くのを待って立ち上がる。スーツのアーマーを作ってくれたトルビョンに感謝しよう。そう自分に言い聞かせながら。

「ふたりとも、大丈夫？」

返事がない。確認しなくては。スーツのディスプレイは点かない。体を起こすときに翼からきしむ音がしていた、片方折れてしまったのだろう。体が痛い——動き続けていたから、疲労が溜まってきている。兄妹のほうに目をやると、ハナンは身を守るように体を丸めていた。怯えた目で私を見上げている。兄のほうは動かない。爆風の衝撃で気絶しているのだ。外に目を向けてみたが、ほとんど見えない。地下深くに埋められているかのようにだった。ヴァルキリーのシステムもオフライン。間違いない、私たちは閉じ込められてしまったのだ。

寒気がする。まるで壁が迫ってくるかのように感じられる。あの日、病院が爆撃されたとき、私の両親も同じ気持ちだったのだろうか？ ふたりは一緒にいたの？ 何が起こっていたのか、理解していた？ こんな気持ちで最期を迎えたかもしれないなんて、考えたくもない。思いを巡らせている私の耳に、建物の断末魔のようなきしみが届いた。ここでもたもたしてはいられない。この部屋にも炎が燃え移ってくるかもしれない。酸素が足りなくなるかもしれない。瓦礫に潰されるかもしれない。また爆発が起きたらどうなる？

やるべきことはひとつしかない。

私はスタッフを背中にくくりつけ、少年を抱え上げてゆっくりと出口に向かい始める。

「ハナン、ついてきて。気をつけるのよ」

床の隙間を越えながら、少しずつ、少しずつ、廊下を進んだ。あと少しで正面玄関というところで、新たな爆発が次々と起こった。壁がギシギシと不穏な音を立てている。これ以上は持たない。

「ドアに向かって！ 走って！」

私はハナンに向かって叫んだ。とうとう建物が崩れ始めたのだ。

抱きかかえている少年の名前を聞いておかなかったことを後悔した。隙間を飛び越えながらたわんだ床を走るが、このままでは間に合わない。壁が、建物が崩れる。周りの世界が壊れていくかのようだ。他に脱出できるような所を急いで探す、どこにもない。他の解決策がすべて尽きてしまった以上、私にできることは一つ。自分の手で守れる者を守らなければ。

私は急いで少年に覆いかぶさる。大きな瓦礫が次々と私の背中にぶつかり、床に押し付けられる。

そのまま、世界は真っ暗になった。

しばらくすると、ふたたび世界に光が差し込んできた。私を呼ぶ声が聞こえる。私に申し掛かっていた重いものが取り除かれた。体の下にはハナンの兄…… 名前は？ ヴァルキリースーツによると、少年は無事なようだ。もちろん、怪我の治療は必要だが。

「ハナン……」

ぼんやりしながら少女の名を呼んでみるが、返事はない。

私は咳き込みながら体を起こす。背中の上に乗っていたコンクリート片がパラパラと音を立てながら落ちていった。力強い手が私の腕を掴む。ジャックだ。マスクを外した彼の顔を見て、人間に戻った、と思う。マスクで覆われていた部分以外は埃とすすで汚れ、ジャケットにはいくつか新しい穴が空いている。

「アンジェラ。脱出するぞ」

「女の子は？」

「無事だとも」

咳き込みながら尋ねた私の問いに答えたのは、煙霧の向こうにいたアナだった。縄張りを見張る猫のような動きで、辺りをくまなく警戒している。

「さあ、行こう」



その日は慌ただしく過ごした。キャンプには戦火に巻き込まれた人々が押し寄せ、中には警察官、ヘリックスのエージェント、救急隊員の姿もあった。医師も、ベッドも、時間も足りない。一日が終わるころには、私はすっかり疲れ果て、なんの感情もなくコーヒーだけでなんとか動いている有様だった。

太陽が地平線の向こうに沈み、夜の冷え込みがキャンプを包むまで働き続けていた。ようやく休憩を取れるようになった頃、ジャックとアナが私に会いに来た。マスクはしていないが、その姿は私の心に焼きついていた。それぞれ大きな荷物を持っている。

「次はどこへ？」

「このままガブリエルを追う」

ジャックが手短かに答える。私はまだ、先の戦場で見たものや起きたことを頭の中で整理する余裕もなかった。

「生きているの？」

にわかには信じられなかった私は聞き返し、すぐに自分の言葉に顔をしかめた。今日はあまりにも多くの命が失われた。なのに、そんなことを聞かなくて。

「俺たち強化兵士はそう簡単には死なない」

ジャックはため息をつく。

「襲撃を主導していたのは奴だ。急いで痕跡を辿らねば。行き先はヨーロッパのとある場所だろう。ここに寄る前、俺たちもそこを目指していた。知った顔にも会えるだろうな」

「幸運を祈るわ。何を探しているのかは知らないけど…… 見つかるといいわね」

「一緒に来ないか。また君の力を借りたい」

ジャックの声音から、私が承諾するはずがないと思っているのが伝わってくる。

「ここにはもういられないけど、あなたたちと一緒にも行けない」

私は首を振った。

「あなたたちとは目指すものが違うの」



「どうかな。いずれわかるだろう」

予想通りの答えを聞いたらしいジャックは頷いた。

「達者でな、アンジェラ。医療キットをありがとう」

ジャックはニヤリと笑い、荷物を肩にかけると、敬礼の真似をして出て行った。まだ留まっているアナとふたりで彼を見送る。アナが私の肩に手を置いた。

「我々は同じ戦いをしているんだ」

「同じ戦いなんて、今までしたことないじゃない…… そもそも、私は戦いが嫌いなものよ」

「それでも、皆まだ戦っている。ジャックも昔ほど理想を追わなくなったとはいえ、相変わらずの頑固者だしな」

アナはため息をついた。

「去っていくものが増えるほど、手放したくないと思うものだ」

「過去とは戦えないわ。ジャックも本当は分かっているはずよ」

「あいつは常に何かと戦っていなければならない男だからな」

アナはすっと目を細める。

「我々の世代の戦争はとっくに終わった。どの世代にも、戦わなくてはならない戦争が必ずある。血を流すため、金のため、王や国のため、そして正義や信念のため——私たちは様々なものために戦う。だが、戦いは戦場で起きるとは限らないし、何十年と続くものもあれば、私たちのように一瞬で終わるものもある。ガブリエルは人類を救うチームは作れたが、世界の再建まではできなかった。アダウエや他の連中がその役目を選んだのがジャックだ。情け深く、勇敢で、自信にあふれた、政治もできる戦争の英雄。うってつけの人材だろう？ だが結局のところ、ジャックは根っからの兵士だ。そして兵士にできる生き方はひとつ。私たちに世界は変えられん。守ることしかできないのだ」

「他の皆は、そのためにいたのよ」

アナは、悲しげに頷いた。

「我々は、後に続く者たちにバトンを渡すことができなかった。平和な時代をどう生きればいいのかわからなかったんだ」

アナは自分の眼帯を指差して言った。

「“この件”のあと、静かな隠居生活を送ろうと思っていたはずなのに、私はここにいる。そなたやレ

ナ、ソジョンたちは、我々とは違う視点を持っている——ようやく少しは理解できたよ。私は自分が歩んだ道が、誰かの道標になればそれでいい」

「なら、なぜウィンストンのところに戻らないの？ ジャックの復讐に付き合う必要はないはずよ」

「理想を語るのは若者の特権なのさ、アンジェラよ」

アナは悲しそうな笑みを浮かべて続ける。

「あまり厳しいことは言わないでくれ。一度ヒーローと呼ばれた人間は、簡単にマントを脱げないものなのだ」

もうお互いに交わす言葉は何もなかった。しばらくするとアナは私の肩をぼんと優しく叩き、闇夜に飲み込まれるように消えてしまった。

何度も経験してきたはずなのに、未だに別れを告げるのが下手だ。何か言葉を口にできたこともあったし、できないこともあった。後者の方が多かったし、いつまでも心に引っかかっているのも後者だ。せっかくふたりに改めてさよならを言うチャンスがあったのに、結局なんの言葉も出てこなかった。昔、ふたりの墓前で別れを告げたときとは何かが違う。去っていく背中を見ても、これで最後だとは思えなかった。



「お疲れ様、”マーシー”」

間に合わせの受付兼患者受け入れ窓口となっている大きなテントのフラップを押上げると、中で仕事していたマハムードがそう言って迎えてくれた。彼はパソコンの画面からちらりとこちらを見て、カタカタと高速でタイピングを続ける。

「勘弁してちょうだい」

「ごめん」

しおらしく謝るものの、顔がにやけている。

「いつか君をそう呼んでみたくてさ。何ヶ月もずっとウズウズしてたんだ」

「ご満足いただけただけかしら？」

私はため息をついた。

「私が連れてきた子たちがどうなったか、教えてくれる？」

マハムードがパチパチとキーを数回叩く。

「まだお迎えを待ってるよ」

そんな。腕時計に視線を落とすと、思っていたよりずいぶん遅い時間だった。

「ご両親には知らせたの？ もう何時間も経つのよ」

マハムードは私の問いかけに答えたくないようだった。

——そうか。

しばしの沈黙ののち、マハムードはようやく兄妹の両親はふたりとも死亡していたことと、近親者を探している最中であることを教えてくれた。

あの日の私も、両親が迎えに来るのをいつまでも待っていた。ふたりが死んだことを教えてくれた警官の

声は今でも覚えているが、顔はまったく思い出せない。

「ジーグラー博士？ 大丈夫かい？」

眼鏡の奥でこぼれた涙を無意識に指で払った私を見て、マハムードは心配そうだ。

「疲れているだけよ」

「君はよくやったよ。君が建物から避難させなかったら、あの子たちは助からなかったんだ」

「誰かがやらなきゃね」

テントが急に窮屈に感じられた。息が詰まったような感覚に襲われた私はぶつくさ言いながら外に出た。

ギザ台地に黄昏時が訪れる。びっしりと隙間なく並べられた処置用テントの白い帆布が、埃っぽい日光の名残を反射している。その光景は、風にも、日の光にも、時にも負けず何千年も永らえてきたマスタバが並んでいるかのようだ。近くの墓に眠る古代エジプト人は永遠の命を求め、生前も死後も多くのものを捧げたが、結局それを手にしたものはいない。視線を巡らせていると、テントの間の隙間にハナンとその兄を見つけた。ハナンはコートの上に横たわった兄の隣に座って、彼を励まそうとしているようだ。

アナの言葉が脳裏に蘇ってくる。ここ数年、私は自らの戦いに負けたとばかり思い込んでいた。オーバーウォッチに加わろうと心を決め、ジャックのオフィスを訪ねたあの頃ほどの希望を持てるかどうかはわからない。でも、あの時私を突き動かしていた炎は、今も心の中で燃えている。苦闘と不信と論争によって、私の心に満ちていたヒロイズムは確かに一度底をついたし、もう元に戻らないのだと思っていた。でも、私たちは日々課題や危機に立ち向かっていかなければ生きていけない。戦う意志がすり減ってしまっても、いつかはまた湧き起こる。翼のように腕を伸ばしたハナンの姿を見て、私は自分の戦いがまだ終わっていないことを悟った。

——英雄は死なず。







BLIZZARD[®]
ENTERTAINMENT